

夷言俗話

二

記

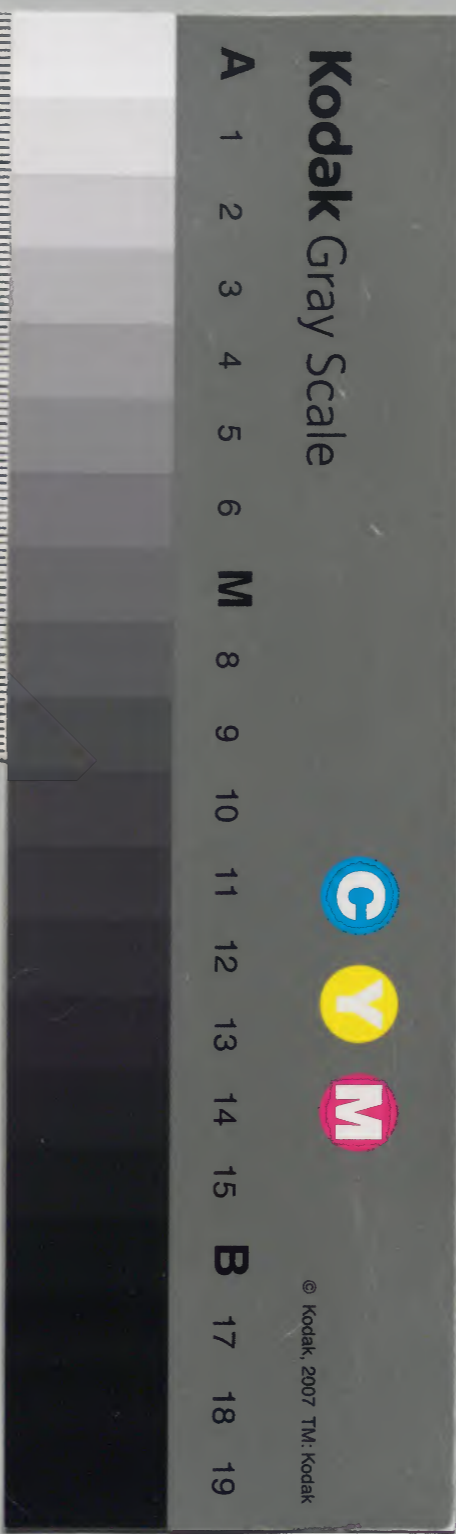
第三百六十二函

庫	文	函	416
二〇七	三五	一三	四
架	冊	號	類

和書門			
二	一	四	三五
冊	架	函	號

和書
三五
一三

內閣文庫	
番號	和 35134
冊數	2 (1)
函號	207 416



編修 夷諺俗話
備用 精



或書曰天下國家乃大用成之との事
夫文智習老也といふこと此事の源
波事には不得たつて其文の治子
不仕事て良道此本乃長徳を其所く
我の所はやく其人を奉用とて金浪
等の賊竇試作又収め順に違ふとこの
二事之也不煩小なり皆ハ玉家礼を
善くむ作る事ハ國家治り上下



喜入夏奉饒氏曰天下乃大用唯用人
此理賊二事最大也と言ひ賊實を以
て収束小遣り等の一事ハ算殺り非
され此の如く事と共算算を好み細
りい道よを所しよの収生涯り樂
ともなひ及ぬるを是も古史を業也
な一ふ門人とも教示せし、今年
お量と公用の勢、四月下旬京都
を發し奥平路南紀津原を經て
海外振夷地へ赴き松花より振夷地の

極奥豊谷を至り秋と來り
かりし石持川よりシユツ城とを
し東振夷地の渡をふりて昔の
旅館のゆりぬ夷地を造り申の坪洗奇
事とを地人にも同需る官用解力
乃折る書集たり勿海振夷地と
見ざる事一ツとて奇事なり
の事一あは申小宮上子員子
振夷草浅く粗澁くを要ある事
面色松前富合に於て書く書

綴りく夷語俗語と号け侍り也
文乃拙きをえり人由侍り多し
うーと雨云

寛政四子年

冬十一月

中原若仲 正峯識

夷語俗語並目錄

卷之壹

一 振夷風俗之事

一 天度之事

一 疵瘡之事

一 海氣川魚之事

一 振夷地のか之事

一 加皮帯杜活のか之事

一 卷之貳

一 一ノフミ又と云之事

— シノツサト云事 —

— 交易云事 —

— 振夷食糧云事 —

— 琢希沙石云事 —

— 鰍漁云事 —

— 因松若相場云事 —

— シヤリ蟹云事 —

— ホロヘツ此濱矣魚云事 —

— リイニリ濱矣魚云事 —

— トケ魚云事 —

— 振夷地は氣多々集り云事 —

— 卷之三云事 —

— ウカルの云事 —

— メソコ乃の云事 —

— 雅和破和津波云事 —

— 急素風車云事 —

— 振夷地は麻云事 —

— ムツクソの云事 —

— 卷之四云事 —

— ヤンガラブテと云事 —

リイシリ獄ゝのり

アトイヘンケのり

振夷ゝのり

ヲブゝのり

英糖カメクリのり

メノコシのり

アカミチのり

トシシのり

イコンのり

ヲキナのり

テケバセのり

海水氷のり

ソウヤのり

魚油のり

ケムニのり

シヤラカム井のり

ドミのり

メノコムのり

箱籠のり

ヘナリのり

— 落の糸めく版と抄事

— 女犬糧の子紙書事

— サイムニ乃事

— 振夷人支度成返書と啓事

— 巻くみ

— ウス藏事

— カム井ユタニの事

— カウリ事

— ハウチコル乃事

— 振夷切定事

— カチコルイへの事

— 水豹事

— 繻事

— イヌニベイへの事

— ラウニベ乃事

— チシヨルコマの事

— ウルツフ事

— カム井ニセツフ事

— イワンルコトウヲマフンベ乃事

— カム井シマの事

一 チヤウケンが事

一 トツコカモイの事

一 イシカリ川シエツ裁の事

一 チムシヤの事

一 コレマカ峠の事

一 白川

一 下

一 上

一 中

一 下

夷語俗活巻之目録

一 夷語目録

一 賑夷風俗の事

一 天度の事

一 痘瘡の事

一 海氣引漁の事

一 賑夷地のかの事

一 加良弗杜の事

一 天智の十一年
 一 天智の十二年
 一 天智の十三年
 一 天智の十四年
 一 天智の十五年
 一 天智の十六年
 一 天智の十七年
 一 天智の十八年
 一 天智の十九年
 一 天智の二十年

蝦夷風俗乃事

夫蝦夷の我朝へ送ひし書部より本邦へ送ひし
 始に古書紙抄ふ人五十二代景行天皇御宇臣内
 大臣養子と曰東夷日高見國乃七人異形より
 血氣少く山々登り事多の如く此を乞ふ事然の
 こと此は荒れと狭き刀を刀のうらゝ帯し曰
 されしらの農地を汚け人臣採免因來王化
 へ送るは証せしんはとて同く日本武尊
 初に奉しし是と對子けしは是より我朝へ送る
 と有りし年實政に子年近凡一子七百武十二年なり

其のち三十一代敏達帝乃清沙字者古舉いしもの
のりや又六十代桓武帝の河代坂上田村麻呂勅を
奉りて悉く東夷此比と詔め海に因りて塞を
かきと能く在りて一變り傳りて以後文治
六年源延尉眞品秀衡の諱をこころせし。源爲
の余も信とて館へ討手向ひ信く義経を介浪
臣衣川より自害と披露し。塞ふ小坂夷比、唐
の流ひし。坂夷人古其武威をこぼし信く。夫より今
國へ渡り信ひし。此を信く。事なり。西坂夷比スツと
之場示の内へ辨慶所といふあり。又之を先イリマと云

場示の内へ。事年湯と云わて是。其年坂夷人の對
事年。あらるし。約法せし。新元。其年。話と云。信
より。其年。夷と云。其年。義経と云。マ。イ。ク。ル。其年。又。ク。キ
クル。此。が。し。と。云。事。今。よ。と。名。あり。其。後。早。霜。押。後
ア。と。喜。在。三。年。若。狭。と。源。行。廣。と。云。若。海。と。云。或。と。夷
申。入。り。逆。は。南。海。水。の。比。と。平。定。者。と。信。廣。若。狭
玉。能。任。人。武。田。を。所。と。稱。し。堀。河。と。名。宗。又。比。ク。信。
より。く。氏。を。松。前。と。段。則。松。前。氏。乃。先。祖。之。斯。日。也。
從。法。が。し。て。武。子。年。の。逆。と。い。ふ。も。未。道。宗。の。數。を
披。り。事。長。く。ア。ツ。シ。と。云。其。の。皮。も。く。海。

たゞと云ふ一在社よりして笠鞋履と用ひしこれ
裸洗なり身は濃と穿く師と好く其法家
と色多く而色一様と速く惣のこくり
色中ひきるとつり故に上古名人も本云ふ
と一其性質の由にあらはれ古史易名訓
振夷と徳謀のやあて一辨其性質好くして
車がふひ女と遊居と耐入事と文とを
信又文字及席がき友甲子紀年と都のや
暖とゆき春秋を分り月乃盈欲ととく期望を
今波の通ふかく古史の波とて實と一山井海に振

群蓋法典と獲く食や一屋室と唯は獲のみと
史と然筆と果ね或る旅費と心とて聞か家内と
見まむ古訓アアアア先は旅費乃事なり是と
交其よるまきナと云物と交其は後古の事一園が
裡と溜斗りて食料と長一いりアアは其むと
らりし物と海ひても其物と流ふとさるもかく
溜の内も指し和と一ては口入も形とて
行くと其言又何れ其言と付とやもり流ひと其
その溜もそ養て食一食物も多く魚油とさす
るもそ交其内とて溜り奥きとの溜り

柳かゝ湯浴を勿論胡記出てし、手水もふとを
し、かゝ手拭も所持有海より上りて、と、湯を
ふてい、湯の火を、高し、丁に、かり、大小便を、
も、手も、洗、し、ひ、着、し、の、中、漢、の、器、の、間、に、
敷、外、も、襦、も、脱、く、ア、ツ、と、着、脱、も、行、て、
敷、中、外、も、出、入、も、い、運、上、を、行、送、も、大、の、夜、
敷、も、西、島、も、う、た、れ、古、間、も、
野、部、の、極、か、り、て、前、文、も、
し、り、り、の、東、二、十、年、
の、風、俗、も、
福、之、事、

未、定、け、に、形、漢、も、
若、者、忠、に、
乃、と、
と、
若、
出、
く、
活、
し、
予、書、

書見きり又曹官合不働夷りうちテケハセト
多ハカチヘカチと云ふ年拾貳載。ゆるり是と手印を
手花徳をキキよふ極否込をくいろはと事見
よりいテケハセ子分よニシハのニシハと云ふ風俗より
加み手自刀振差此去似平一竹と草の莖より大
小を格汚と汚三板より作キキ是と指候ひ君を
アサと云夷ももんをあまう働夷やう。雨冷あく
たの大小と汚キキとてあやまりて刀の
汚と破りきり候へテケハセ大まふ憤りるや細を
後キキよりうじき花と友と曹官を配人通

洞魚村山長之節と云者しお人うて色くし事と歴
りきりこれ本云もて飛ら友長之節板めて汚を格汚
且キキ持合きし汚とアサよりりのツクナイツクナイの
後キキ
がりとて汚盤をキキ湖よりん虫をたり形一神
シヤモフリとシヤモフリと云ふ好まキキくさふ情人家
れハ場をキキとて教育せしはをうキキて
上國の風ハキキ福を全記とたキキなり
天度地事
今年賑夷地ハキキ事尚事二月よりキキ極
支度もキキ相入キキ中キキ水抽出比例

量乃候筈と作傳の如く為申すと見ゆ事なく候
筈意なく申す事ある候事申す新案の候筈と考へ
作らるる因幡候と名付是と持来せし先達候
之候より松前振夷地の場つウヤ場西近の山極出地
度と測り得きと測れたの如し

奥品津柳之原

四十二度弱

同松前

四十二度

同松前石浜村

松前
十一里

四十二度三十分

西振夷地カキナイ

同日
二十八里

四十二度七十分

同カイジ

同日
四十六里

四十二度四十分

同フルウ之内イヌル

四十二度半

同

同日
百十里

四十六度弱

同トミイ

同日
百二十里

四十六度

同テシヲ

四十六度強

同ソウヤ

同日
百七十七里

四十六度三十分

曹谷と振夷地の極真よりて之を通過する松前よりには
百里と記しきり、之を松前人より官より區り申す事
なく武百里或は百里拾里なりと云々申す事なく
事なり申す事なく申す事なく申す事なく申す事なく
田畑と云ふ事なく申す事なく申す事なく申す事なく

目分量之云事あるは、其用ひく、一、海、船、東、北、
場、西、場、北、場、廣く曹谷場、南の内と南の方
テ、シ、サ、境、イ、キ、コ、マ、ナ、イ、と、云、云、より、同、場、南、の、内、北、の
方、シ、レ、ト、コ、と、云、云、云、云、凡、百、拾、口、里、半、あり、け、里、數、の
内、と、曹、谷、の、持、場、之、野、持、場、廣く、半、あり、
引、届、く、は、里、數、と、取、り、半、あり、半、お、お、苗、の、里
數、凡、百、口、云、云、の、半、度、松、苗、と、出、帆、せ、し、り、り、松、中
より、空、眼、見、積、と、取、り、一、場、南、より、數、里、後、
なる、との、事、為、り、凡、一、半、度、曹、谷、全、而、
近、の、道、法、松、苗、の、引、届、凡、百、七、十、七、里、と、記、し、海、を、り

三

少、極、出、北、松、苗、は、十二、度、曹、谷、と、同、十二、度、二十、三、分、相
減、し、く、差、四、度、二十、三、分、が、り、天、の、一、度、と、北、球、皮、を、て
と、二十九、里、半、強、く、一、里、數、と、積、り、見、る、小、松、苗、の、曹、谷、近
の、直、徑、百、二十、八、里、余、が、り、曹、谷、と、松、苗、より、正、北、十、尚
と、古、路、程、度、を、曲、り、れ、と、百、七、十、七、里、と、記、し、そ、の、と、遠
矢、せ、し、と、云、云、の、天、度、と、側、り、候、意、の、半、と、云、云、
如、く、東、始、發、見、の、意、を、り、遠、立、せ、し、り、の、が、れ、
言、し、け、し、の、曹、谷、苗、苗、の、内、に、種、く、二、丈、と、し、り、
一、ツ、の、意、と、初、考、は、出、し、り、誤、り、と、考、け、て、乾、坤、量
候、と、後、と、は、候、意、と、他、ら、し、り、凡、今、一、度、天、度、と、凡、

度より半なり天度測量の点と一國を極し
んがと扱ふるのりもてらる用ひ初し較百里と隔
極を小極すは天比の中ハ座して四ノ下と大分
遠なり右星較を隔て測量せし其数及其測り
當せしやと此と知し事難く右較百里と隔る量
りんとらふも遠境をたりし事難く其
四路中の貴多く彼是正交なりゆを負交り遠
度力よ及難よりしもをふしと

公用乃中も携り私用の貴多く較百里と隔地
きとのをふたの二點とも、初考なり、海へ生涯の

治よりきりしとのに相中しは新製の儀と云此
皮較百里と隔る此と度數と測量なりと云
の精疎も極しん度大なりなり新案乃乾
坤量儀と云一天度と量り及所見山と谷深は
幅も各一一分と云と量り知事事之此の一度の
星較も先哲通にが説も何と是に何を
非本定先しと云りしと天文厩測の所しと
紫陽生先生一書儀と云秘稿も書残されし
扱へ考へる一一度と此皮の二十九里四百八十七分
の二百七十七里と或人の秘書も亦人

乃カムサヌカ
夫の事

の説をあげしもたなり赤人の説よりウエルスタ面
令みく地球の一度とかり赤人の入とアルこと
云則日中の曲入二人四寸ありアルこと三ッ合々の
曲入七人二寸是と揮とかり則サセンとリ入サセ
こと入百合々ウエルスタと云別我朝の二百六十
丈と云則サ何之是と百合々地球の一度なり
右一度と二十九里六寸等と云云一度
の里数とい赤人の説と細おれり先師の説と赤人の
説と云々ゆふ地球は一度の里数十四所の差は
かり先哲の説と違ふゆふ云一度とい十里或は

四十二里なりと云説あり又云是れ教子星を隔てりん
即の説とカムサスカ赤人の説と大差なきを審み
考むる又云々云々考へ地り一因輝儀と云
一海より極北地四十二度と性古滋川氏乃祖
春海先生の天文成象より出り流し一極北出地の
度と適合なり

地瘡の事

順夷地は地瘡の病となり一和十は年已云云年
秋始て順夷地マシケト云和逆夷人海よりぬい病死
せしもの多かりと云り一和十西順夷地イニカリの

夷人となりて思業を以ては一神志麻又
藤が夷人の事なきにやその事ハ神の如く
に一石を帝教へ一舟を以て一官を以て公安坊
にて其後中々満室りなき左流りの風邪
おつれりしと云ふ事り右始て振夷地
振夷地流り
せしは程百二十里トて、イとの事なり西振
夷地をトて、イより先と東振夷地をトての事
人も一夷人、振夷地の治癒をトて、い
振夷地をトて、イより先と東振夷地をトての事
事と振夷地、振夷地の事、小児出生の時胎血と合

して腹中より出たり付あり其毒を以て發せし事あり
振夷病人の事、振夷地を以て流りし事あり
人生れて一度と怪重なり其毒を以て發せし事あり
振夷地を以て東振夷地を以て流りし事あり
ゆく前後の村を振夷地流りし事あり
モツへの一と云ふ事あり其毒を以て發せし事あり日
城振夷地の始と天平七年築業の始と振夷地を
かひ中一と云ふ事あり其毒を以て發せし事あり
か事あり今年寛政に事あり一十六年、
振夷地、振夷地、振夷地、振夷地、振夷地、振夷地、

ゆくみつた十集きく時改ふらう。若くは海蔵
川東の各名を記し、まよし十とよみきく時正の
字の一畫とを記し、かき入る年隨う一とよみきく
を書一畫と入す。正の字出はやく式百の中二
くくみ百とぬれ候へ、集へ、字よ海蔵み十とあきと
積り附らば度と一とよみ二つ宛トツブと唯よ集へ
かき入はして候。ぬれ百と十みあれとアとキ子ツフイカ
二ワニハエアルワノホツイカニツシ子ワノホツかくきり
是くみ百と十みと云々集へぬ百と十みと日付海蔵
たり帳表きくしハ二十一つたり。近遠ありまよし、たり

たの川を流し、日く、手帳、竹、きく、是く海蔵
すく、清丸付と更述、後、海蔵、せき、き、め、り
海蔵、く、殺と改の、き、り、た、ま、日、の、川、を、よ、海、蔵、
み、百、の、上、川、を、も、り、東、へ、湯、酒、一、き、つ、子、以、上、川、を、東、へ、
と、武、吉、つ、た、の、さ、川、を、も、り、東、の、候、く、矢、立、の、き、り、と、記、
を、き、東、合、所、へ、以、て、候、と、ま、り、り、え、ま、り、た、く、東、と、記、抄、
右、の、湯、酒、と、候、東、は、各、ま、り、り、たり、是、ハ、は、な、な、月、
所、の、き、あ、り、か、く、の、め、く、せ、し、一、に、候、東、も、改、と、記、き、く、
を、海、蔵、と、我、を、く、一、持、り、又、ハ、候、と、よ、し、り、東、年、
大、湯、酒、湯、酒、一、川、揚、き、り、候、く、湯、酒、入、き、き、り、り、

英よりく見せ川上げせさき入申の申と極支は
十兆半杖の如く通一十申と一連くく圖が
程の上泊一にみり乾一上げ又を日當りぬく
をく十連くといり子の敷ふぬ申と一して今所へ持
ちぬる交易を英海氣百に月去米の量細く
武合み夕入梳へほりれぬ右の梳くく三三
舟のふと交易がしぬと申一准一する價が
今所へ泊りきぬる英海氣とメノコと
今所の板の間く申と後く申ふ但メノコは十
人又を七八十人も尋ら申事とけり見と小使

中ノ月 小島と云ふ村の距離と云ふもの
其のうら海のものも加へる 今所家寄のメノコと

集らる所のぬきメノコの改めくす
く二三里又を六里隔するノツサブクツサバツカイ
ルエラニシルと云ふ船合六と申して船敷三百艘余海氣
川一にかりく申す英メノコと云は百人集るに渡り平
均一に海氣は百兆河時三百艘あり一四千海氣
十二万と英海氣儀ありて申す申と凡そ二の武の
して一四千拾申揚申なり六月申旬より河は
是を人数の増えと六月初旬より河はとを七月
中旬より必流し申す風荒吹ぬる渡り申

果敢引こりし一日和淨合十日換けし十日二百
若也出たし二十日換けし二百をきむ国より各城
武十之貫目元は是是と行ふと一と二百と十と近
いり子と松あへし一松あへし諸債物をしる若浩
合居て燕海氣張るく買上るべき行ふ身代減
武百六十又元の定由換なり七と百本の代減
九子二百七拾の費又之減相場支替六費又はし
令る由とは子の百六拾式支或分他ト也減はし
振束地交易と兼八本入を懐く燕海氣の百元へ
是もあへし云いり二百元兼入をきむ別合点

兼由申候より下あり小買といり子扱め百と下の
くしちのゆく百元兼六元元への百のいりこたんと
代兼八本入を懐かりむいりこのきむ燕下度申入
交易入品と進く貸付金状よりなりて是河切定と
すし事し又貸付の外に現金交易進付物と持株
由る價の品と河切定通しなり右燕海氣百と兼
兼の由の割合といりこき本をの價兼八本入
拾八懐と六本付兼を右の半の八本入を懐かり
子の百との割合といりこき本の價八本入を中
伊懐け兼を右九半式本なりと燕海氣百本の

さうして米は拾式石遠く二百石のさうして米百式
十石遠くふふ等なり。別合なりあうりけ振
合うて交易なりさうのなりて小費の夫の換運上届の位
かりいりこふ百とせむを運上届の換束の位なり
に百の中しと百やいりこふ中の遠いしと運上届の遠い
夫并に付は交易なりし中しと知付しと夫しあ
うやいりこ交易現令賣のさうしと一と一持束
らはふ百とばさめて交易なりし夫しあうりたの
やくいれ入き儀。並海氣の百の別合うて並海
氣の百中の交易代米の百七拾六石米相換束

石番うして別代合の百七拾六束相換束の事。曹
若り杉木と運賃と相換百石同、舟重拾六束
分束うて並海氣の百中の相換石さう百七拾六石
の中目しと目方中貫目代を在しす。等法之
百中の運賃令式指し兩水は百六拾式又六十並海
氣交易令さうし合う合ふ百四束水は百六拾式又
さうりこ疊押代束さう七百式指さうし内を交易令
さうし河沙さうし合ふ百式指さうし水は百六拾七式又合
さうしとさうした交易令さうし外は雇人給分版束束
分抱束束おさうしなり

かよき事外 喉合も苦交持子なり多へ首筋と捕
初の神先へ川上金と娘しりて尻とあり赤き身
振ひとせし身ゆいとしりて時中よまよる中へ
宗合居とる若し定と身振ひとせし身とせし
向ひ変て身振ひとしりて裁きて三合をくし
眉へ若と身振ひとせしと油を漏るる若
よきこと能身ゆいとしりて時中よまよる中へ
右のゆくを合とる若し定と身振ひとせし
薄く感しきは中へありし
今この 序大治のたの事

カラフト語とてを初とかく事すもる赤形は人衆
若物と後神先より初のゆくを記しつけし保の保
と梅しりし首より若し定と身振ひとせし
しりて大い確かきて史の其細く候しや枝保と
たのそよのけが合とる若し定と身振ひとせし
初因のゆく丸く梅しりし首より若し定と身振ひとせし
若のゆきし水とのと師と其合との入浴のえと若し
人の初と川よりしりて又いと遊入るるいと川
のを夢のゆくゆく遊ますし止まらざるいと川
かけ川 自由が事も事し又若の遊りしと若の

ざらざらりふまゝりしと大なる事なりとのりて度カラフ
 トス人分の面く眼をえ法をさるのなりり原を法と
 曹谷より言ひ一帯く海上十八里満きと法なり
 水一長くやりと振夷地はとありき法のなりと
 振夷地より松をより葡萄のさりとて或は運上を
 けりしと道の場と云ふ事なりと云ふ原を法の事
 附添く事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

夷語俗話巻之貳

目録

- 一 イフミヌと云事
- 一 シノツサと云事
- 一 文易乃事
- 一 振夷食種事
- 一 珍奇なる石の事
- 一 龍溪の事
- 一 同松花相庭の事
- 一 コヤリ蟹の事

一 ホロヘツの漢考奥の事

一 リイシリ漢異書の事

一 トケ奥の事

一 振夷地へ流多く集る事

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

イフミヌと云事

イフミヌと云事と譯し、音はヌと云の當ふ年

口叔交易の中の事なり、昔名のメノコ武指二人

連きて昔名場の内マスア、の山奥へ姚百人を

こらよりきり始ゆり、其のツレブと云草みくも

其根と飯能めが、まをなりより、このまを

昔名の惣し名、此名より、此名のシウテエし、妹

昔名場の内、此れこと、其のこ名リイニヤンダ

と云とのマテ、マテと云、いメノコと云、メノコモ人答

武人の引束を、れを、武指人のとの、山の内と云

紙ナリ曹官交易定車辰たふ取すハ本入
弟を懐身

紙ニ水 但紙ニテヲ連シト云十連シト云ホト云

葉海氣六百

紙ニ水 但紙ニ十中ニホト云ホト云

紙拾冬末 但大日リ 但尾年ホト云ホト云

子紙ニ水 但大日リ

紙 アダツ

紙 アダツ

紙子ニ水 但紙ニ中ニ水

白子ニ水 但大日リ

紙目ニ水 但右日リ

推草ニ水

トニ皮ニ水

水新皮ニ水

及アツシニ水

白幅ヲアツシニ水

アブスケニ水 但底層のヨリ

キナニ水 但夾苴のヨリ

右ノ外

粟油武斗入を符

代八本入之儀

熟燈をえを符

同拾口之儀を武拾儀に

十徳をツツを符

代粟油を武斗入三符をえ合

同中馬同

同三符をえ合六符に

同中一馬同

同八符をえ合

阪切又入を符

同武符

鷹羽尾を符

同を符をえ合

同落氷同

同武符を四符に

同直符同

同六符を拾符に

唐を相符

代酒を六五小符を符

右の油を交易を取込に合とて油の代り符を渡す
右の油を交易を符に合入符を渡す
八本入符を渡すの交易のふたのど

酒小符

八本入を符

碇

石符

濁酒

同武符

煙草

三把

田代

出度丁の符

同符

二夜

夷梳

二六ッ

烟管 三本

麴 七本入 七俵

鴨 大小 七俵

耳環 二托

火步 二枚

右外

酒桶 大毛 油 八本入 二俵 高

同 小毛 二俵 高

古毛 二枚 二俵 高 八本入 二俵 拾俵 高

皮溜汁 煙草 七托 高

小汁 二俵 高

本溜系 二俵 高

本溜系 二俵 高

本溜系 二俵 高

本溜系 二俵 高

本溜系 二俵 高

本溜系 二俵 高

右之振合 少 交易の交易し 又 二 交易 高

事之法 乃 本溜系 二俵 高

高 三本 入 二 高

く浦風川溪事と河向は版籍又ハ原鞠酒に
浦風川道々ホ入用と京と外前と書紀し
古と傍落と事し余ハ大磯と混雜とす
シヤコライととゆふりハ入進出ハ
是と事ハ曹苔場正法故交易金所
元初下没的井要師今井元店也
山長と帝と事ハ高人ホモ多
ハ返ん方の方英彼語
カラフトと事ハ物と交易
カラフト交易の
見方の方ハ一
く
の西
氏
川
石
村
若
昔
挿

見方の方ハ一と系強
く
の西
氏
川
石
村
若
昔
挿

圃いふくへ秋より中い海上荒更楓がりのりきん
 夏中版睡ふがひ草とぬりく好むぬるぬるの付由は
 食す先も汐ふりゆく黄て食すくへ七葉版睡り
 好むく其能か〜向め〜揚〜き〜精ふ〜の
 多勝とあり〜粉ふ〜の〜〜〜高の〜〜製〜
 居て食ふ〜其先と丸め更油とと黄て食す又と
 湯煮〜〜と先 事か〜版睡〜用〜草たの〜
 トレツフ 和名 咲百合 キトウ 和名 アイハカ、ブイ
 トマ 和名 桜花、
玉百合と云 アシラコル 和名 桜花、
玉百合と云 へボロ モシカルベ
 以上相試用ゆ

ハル 和名 桜花、
ミヤツと云 ヲモシコ 和名 天女夢 キトウ
 以上並と用ゆ

右の品おれふれゆ其外

ウライハウ 和名 防風 ウベウ 和名 尚平 ウエム 和名 蘇
 マカヨ 和名 欽キ
の根 シタマカヨ キナシユヲラツフ
 アワ、 イツラツフ、 イマツドツ フクサ ウラミ
 ノシキナノムンコルコニ 和名 欽キ イマウル ベ子ツケシ
 クツナ ハツヘスツ イケニ コサ ムケカシ 和名 括杖
 テクムツ イツキ、イナイ ヒツトツキ シヤク
 マサルホツフ ニキカマフレツ 和名 蛇履、
子ウアニ

ニフレフ

和名 イチゴ

イコクツ

和名 虎杖

マサルホツフル

ガマナイ

カタム

イボブケフレフ

ウエヌミタ子

アツトリ

フツボクシハル

イマキア子

ホバ

アツケベチ

ハラテツ

ヲロムクツ

ヲウコノイケ

シシクツ

右の草何れも入るとす 此の草は

此の草は自然に出る草もよく都合のすし程ある

食する草なり

浜青ぬき石乃事

振東地の内証考がら小石の事 幸螺貝の石なり

昔より多くしるす 観蛤帆之貝 雲丹貝 海老の石

此の石はつり木の石よりなり 多しるす 多しるす ありし

昔より石をとりしるす 未だ知らるる者 たるのふく

す 珍しき石をとりしるす 未だ知らるる者 たるのふく

つりサシナイと云洲の海 揚中カムイと云石

あり 通し石を横中白く蛇乃象の紋あり 石あり

是より多しとぬしを 揚中白く蛇乃象の紋あり 石あり

雑漢の事

就網を犯と云 網の目と云 式寸三寸五分 網乃幅目の

枚三十九は十回と云 網の目と云 式寸七寸五分 網乃幅目の

入祀と一放しと云破鏡を棄てて二言録を弄く支を
捨身位を切り改め浮くを身浮の末を七寸神
枕の如くは格細の根を二寸を黄目位の内を
活けを是と従と云又ナツホ石と云と式三百目位の
石を細流とく活格を細く是迄の細入祀一放
し活かくは活身細と云へ是迄付沈しあき扱し付
夕キ重かりタリと云の雑群あき付し付の重なる
あき中しは振積の事と夕キを云と云と活れと云
と云と本より云の如く格是と此の表は重く波風
を起す活けのを重くしりきり付は活れと云と此の

此の如くは活れと云と此の表は重く波風
を起す活けのを重くしりきり付は活れと云と此の
て系出も扱支と細と云とわけ能流さ付と云と
し厚くわく付は二放と放後河上あり重く河揚
付此の通し半式を出し支へ活細と云とわけ細
揚り付細より活流る能は活細の内へ入る細揚は
支を重くしたの活細を重くヤツサと云と云と
ナツホへ河揚をかりはナツホと云と能わけ細と云
細と能へ是迄付細より活流る能とへはと云との
すくひよるかりへはの能と活も出と能とナツホへ
持運るは能のよるりつらつら入る式半格を

口指入をきりし一由聖朝はとらん口指入り
氣入りく死し居きりて救何回こころのよき
わがしとて世振束の小児と昔々小くき板の口指
遣ははるを根うきりきとゆり一室まへ小児と入も
啼出す時をうれをゆきり又と乳を昔々何して
おのシル、モツへめくちのことくめしてを親
と行りしとゆり痛入るりしとこの小児入氣
かりしゆり診敷しきりしとてかたき病とが
居し振束の足と氣冷りれとて大病の中由入
きりしゆりしゆり居しとてきりしゆりし

ゆりしゆり診敷れきりし氣冷りしゆりし
ゆりしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
ゆりしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
ゆりしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
ゆりしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし



